浮世絵美人画の世界

本展では、当館が所蔵する高橋博信コレクションの中から、歌川国貞の連作によって、美人画の世界をご紹介します。歌川国貞（1786～1864）は、幕末期に隆盛を誇った歌川派の中心人物で、その79年の生涯で、1万点を超えるとされる作品を世に送り出しました。その作品のうち多数を占めるのが、さまざまなテーマによる連作錦絵（揃物（そろいもの））です。「七小町」（小野小町の故事）、「八景」（中国から伝来した風景画の画題）といった古典的なテーマから、「思事鏡写絵」「当世三十二相」など、当時の風俗をたくみに取り入れたもの、「奉納手拭見立」のように庶民に知られた美人たちを扱ったもの、「当世夏景色」のように時候の風俗を扱ったもの、また、「東海道五十三次之内」に見られるような風景と美人を取り合わせたものなど、およそ考えられるあらゆるテーマが設定されて連作となりました。それらの作品を見ると、版元（出版社）と絵師（国貞）が、テーマ設定をあれこれ思案している姿が想い浮かぶようです。今回は13のテーマによる連作約40点をご紹介します。当時の興味深い庶民の風俗や嗜好を多彩に反映した錦絵の数々をお楽しみ下さい。

歌川国貞〈（奉納提灯見立）あふら屋そめ〉

歌川国貞〈（近江八景　矢橋帰帆）〉